

# 刻む会 たより

No.37

2008. 12. 19

長生炭鉱の「水非常」を歴史に刻む会

代表 山口武信

事務局

宇部市常盤町一―一九(宇部緑橋教会内)

TEL 〇八三六(二二)八〇〇三

カンパ振込先 ゆうちよ銀行

口座番号 0159017132405  
名義 長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会

本当にカムサムニダ

(遺族と交流した韓国訪問記)

井上 善兼

11月14～16日、2泊3日の行程で韓国を訪問してきました。高速艇ビートルに乗って3時間、釜山ポートターミナルに、キムヒョンス会長、ヤンヒユン副会長、チョンソッコ、ソンドンレ氏が出迎えに来ていました。この4人方々は見送りまでの3日間、行動を共にしていただきました。本当にありがとうございました。

ポートターミナルの食堂で昼食を兼ねて、これからの行程の簡単な打ち合わせを行いました。おおよそ、「大邱のホテルに、遺族会のメンバーが集まってくるので、夕食をは

さみながら交流しましょう」ということが大邱に向かう車中の中でやっとわかった次第です。というのは、ベ長老には、韓国遺族会総会の通訳という大役をお願いしていたのですが、「総会ではなく、遺族に会いに来てくれた日本の『刻む会のメンバー』に対するねざらい」ということでしよう。で、たぶん、迎えに来た4人の遺族とベ長老との間で「今回は観光が主目的なので、折角来られたのだからどうぞ故郷の親族と交流して下さい、同行の間の会話は全さんがいるから大丈夫」ということになったのでしよう。訳のわからないまま、ベ長老と別れました。そんなこんなで全さんの通訳を介しながらの珍道中が始まりました。どうも、総会はないが大邱に遺



遺族の皆さんと一緒に

族会の人たちが集つて来ると聞いて、「なつかしいあの人は、初対面の人もいるのだろう・・・」などと思ひめぐらせながらホテルに向かいました。

たぶん大邱周辺の方々だと思いますが新たに8人の遺族がホテルに出迎えに来てくれていました。夕食までの一時、ホテルの一室に遺族がみんな集まつて来たので、「念願の慰霊碑建立の土地が見つかりそうだ」という報告をしました。「その土地の広さと単価はいくらなのか、どれくらいの費用が必要なのか」など遺族から突っこんだ質問があいっぴぎましたが、こちらの説明がどれだけわかっていただけたか分からないまま、ホテルの近くの焼き肉屋での夕食会となりました。宴も進むにつれて「初対面かなあ？」と思つた人も一度は来日された方々ばかりでした。遺族の方々は訪日した記憶を昨日のように憶えておられているのに、私たち3人は遺族の名前さえわからないという非礼は本当に恥ず

かしい次第です。また、大邱に向かう車中で、島先生が「大邱へ行くことがわかっていたら娘が嫁いだ先のお父さんとも会いたかつたなあ」ということを聞きつけた、ヤンさんが

「お父さん」との連絡にこだわり始めたのですが、アドレスがわかりません。洋子が、この日のために用意した海外対応のケイタイで、オーストラリア在住の娘さんをおしてやつと「お父さん」と連絡がとれましたが、

同じ大邱といつても、とてもすぐに合にこれる距離ではないらしく、電話で「またお会いしましょう」ということになりました。遺族の皆さんの気配りがどれほどのものかを痛感させられました。

夕食を終えて4人の遺族と別れたあと、焼肉屋での交流にあきたらず、大邱市内観光に行こうということになり、すぐ近くの地下鉄で2〜3個の駅を乗り継いで市街地へ行きました。どうやつてホテルにかえつたのかわからないほど酔つぱらつたのでしよう。朝一

番、全さんのホテル中にひびきわたるような「コンコン、おはようございます」という声で叩きおこされました。近くの日本では「吉野家の牛丼」みたいな所での朝食となりましたが、釜山から同行された4人は別としてみんな帰つたのだらうと思つていたころ、朝食を共にするためにだけ、みんな同じホテルに宿泊してくれていたことがわかりました。

大邱で出会つた7人(もう1人のご婦人は昼までつきあつていただきました)の遺族とわかれを告げたあと、2日目は、慶州観光に向かいました。慶州は日本でいえば京都、奈良に当たる古都であり、王朝の古墳群や世界遺産の仏国寺と石窟庵に案内していただきました。とくに、石仏が日本軍の侵略により傷つけられたこと、また、海をのぞむ高台に建立された由来を聞くにつけ、慰霊碑建立がままならない現実に対する「望郷の想い」を指弾されているように思えてなりません。

した。

慶州では、新たに2人の遺族と合流しました。とくに、ソンボンス氏はソウルよりはるか500KMの道のりを車でぶつとばしてきたそうで、昼食のサムゲダン(鳥一匹の腹にぞうすいをつめたようなもの)専門店待ち受けていました。そこで、ソンボンスと同居してきた、日本人女性を紹介されました。彼は、週2回、日本語の勉強を習っているとのこと、その先生だそうです。彼女の通訳で、昨日話をした慰霊碑の件について具体的な話をしたところ、遺族のみなさんの快諾を得ることができました。彼女は、「今日の朝、突然何の事情も話さずに、慶州に行かないか」とさそわれたそうです。「日本にこんな熱い運動があることを知りませんでした。私の母もきつとカンパしてくれと思います」と実家の連絡先をおしえていただきました。たぶん、ソンボンス氏が通訳がない実情を配慮してくれたのだと思います。



巨大な段ボール箱の土産

海鮮鍋の夕食をすませ、また3人の方々とのお別れです。ホテルに着いて、寝酒でも買おうと近くのコンビニに行こうとしたら、後ろからヤンさんがヒョコヒョコと着いて来て、コンビニの隣にあった一杯飲み屋に行こうと意気投合です。島先生、金会長、全さんも合流し、そこで、来年の慰霊祭の具体的な行程を煮詰めました。

2泊3日の韓国訪問も、いよいよ釜山港での別れとなりました。ポートビルには、パクヒョンモ氏が「やっと合流することができ

た」と巨大な段ボール箱の土産(のり)4箱をもって見送りに来てくれました。うれしいやら、どうやって持って帰ったらいいのやら悩みつつやっと家路にたどりつけたという珍道中でした。今回お合いできた遺族の方々の「心づかい」に本当にカムサムニダの一言です。お合いできなかった「あの人、この人」に、又お会いしましょうというところで報告にかえたいと思います。



「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」  
のフィールドワークに参加して

徐 澄子

私はこの夏、初めて宇部に住む友人を訪ね、この行事に参加する機会を得ました。

海辺に近いお寺に案内されて、中に入ると、すでに大勢の人達が集まっていました。

女性の方達は、よく動いて、皆が力を合わせ「会」を維持し守っていくその姿に、尊敬の念と同胞のような親近感が伝わってきました。初対面なのに。



紙芝居の様子

会長のお話や紙芝居などはほんとうに、胸が熱くなり、涙が出てきました。それは、植民地となった朝鮮人の人間の尊厳を、

紙芝居は訴えているからでした。その絵と文章の響きが、聞く人々の心に深く意味を考えながら伝わっていったと思います。子供達が熱心に聞いていたその姿が、印象に残って大阪に帰って来ても、その姿や瞳が焼きついていました。何ができるのかを考えこみました。海に沈んだ長生炭鉱、犠牲者は百八十三名の尊い命。六十六年前の朝鮮と日本の歴史が私の脳に刻み込まれました。

紙芝居は、子供達に何を伝えたでしょうか。人間の命は大切なこと。人を殺さない。戦争はしない。国どうしは仲良くすること。人間の尊厳、優しさ、家族を思う気持ち、故郷をなつかしむ心。ひもじさ、重労働のつらさ、暴力の恐ろしさなどを学んだ事と思います。そしてこの世に戦争のない平和な国々を作らなくてはならないという思いを持ったことでしょう。紙芝居の後、海へ行き、墓標のような二本の炭鉱の排気口が、美しい海に突き出ていました。なんともいえない悲しみが

突き上がってきました。花を捧げ祈りました。きつといつの日か、あなた方の無念の叫びを聴き取って追悼碑を建てましょう！遠く故郷の韓国から遺族を招いて、追悼碑を建てて法事を執り行いましょう！と祈りました。この度、宇部に来て、会長はじめ、皆様の活動に接し、頭がさがりました。

日本の方々がこんなにも私たちの人権に携わり、かかわってくださっている事を、どう言葉に表していいかわかりません。本当にありがとうございました。



海岸にて献花

どうか、末永く活動下されて、追悼碑を建てる事が出来るその日を、切に念願する一人です。

山内 弘恵

私が長生炭鉱の問題に関わって、13年も年月が経過した。その間に、私は3人の子供の母親になってしまった。そして3年前、夫の仕事の都合でアメリカへ移転。その間はメール・ホーム・ページ・手紙で長生の活動を知るだけ。渡米前、10年間何もできないまま活動を中断して日本を去らねばならないことに申し訳なさいっぱいだったが、英語が苦手な私にとって、アメリカで生活することだけでも精一杯で、3年間の間、ほとんどこちらからの連絡ができなかったことに後ろめたさを感じていた。

3年ぶりに日本へ戻って1ヶ月も経たず、フィールドワークに参加することができた。4月に帰国が決まってから、7月に日本へ帰るので、今年は4年ぶりにフィールドワークに参加できる！と楽しみにしていた。フィー

ルドワークは私にとって少し思い入れがある。というのも、「刻む会」の夏の活動としてフィールドワークが定着するきっかけとなったのが、紙芝居「アボジは海の底」。子供にも分かりやすい形のものがあれば・・・という思いから、シナリオ原案を山口会長にお願いし、防府の友人たちの協力を得て、一九九六年作成した。そして、その紙芝居を活用し、子供たちにも参加しやすいフィールドワークを目指した。結果、事故・命日の2月3日付近に行われる追悼式と夏のフィールドワークが市民に向けてこの問題をアピールする年間行事として定着していった。渡米前の10年間の活動を振り返りつつ、帰国してからの自分を模索していた。

7月頭に防府へ戻ってから、時差ボケと新生活の立ち上げで、猛暑の中（我が家にはクーラーがなかったので・・・）、親子共々大変だった。しかし、日程だけでも聞かないと・・・と緑橋教会に電話をした。運よく木

位牌を並べている様子



村さんと連絡が取れ、日時を確認できた。そして、何とか車もギリギリ手に入り、家族皆で行くことができた。

会場の宇部・西岐

波にある西光寺へ行ってみると、懐かしい顔ぶれに加え、新しい顔。参加者も約50名と多く賑わっていた。この3年間の間に、皆さんが地道にがんばられた成果だと思った。3年も何もしていなかったのに、温かく迎えていただいたので、とても嬉しかった。

まず、紙芝居「アボジは海の底」を朗読した後、「刻む会」の島先生よりお話。長生炭鉱の落盤事故について、基本的知識を分かりやすく説明してくださった。

そして、今日のメインゲスト裴東録ペイトンさんのお話。お話の内容は、この春（6月）亡くな



裴東録さんのお話と、裴東録さんの活動についてであつた。

裴来善さんは、

飯塚に強制連行でなくなられた方々の遺骨を納める無窮花堂を二〇〇〇年に建設された。建設前からも「刻む会」とは交流があり、物心両面で「刻む会」の支えとなつてくださった裴来善さんの計報は「刻む会」にとつても、親を亡くしたような辛さだった。私はこの事実を帰国後初めて知った。私も無窮花堂の設立前後、「刻む会」の一人として裴来善さんを訪ねたことがある。裴来善さん本人も強制連行で日本に連れてこられた二世であり、つらい経験がされている。そして、その経験を乗り越えて、同胞のために骨身を削つてご尽力されたのだった。私が裴来善さんにお会いした時、とても温厚で懐の広い方だという印象だった。人間としてこういう人でありた

いと尊敬する存在だった。生前の裴来善さんは長生炭鉱の碑が一日も早く建立できるよう心から願つて、「刻む会」の運動を見守り続けて下さっていた。そして、裴東録さんは裴来善さんの遺言として、「刻む会」のことを頼むと言われたそうだ。

裴東録さんは北九州在住の二世。一世であるオモニ（お母さん）と一緒に大牟田市馬渡記念碑の建立をはじめ、さまざまな問題に尽力された方だ。現在は学校を回る語り部として子供たちに平和教育をしていらつしやるという話を紹介して下さった。裴東録さんも、二世という立場から日朝の架け橋になるために骨身を削つて日々努力されている。長生炭鉱の問題にも長年協力して下さっている方の一人である。

西光寺を後にして、今度は海岸へ。ピーヤ（排気口）の見える海岸で参加者による献花をした。3年前と比べ、湾岸道路が開通しているため、道路からピーヤの海が見えない。

海岸へ降りるとやっとピーヤが見えた。「ああ、またこの場所へ帰ってきた。」そんな気持ちだった。年月が経つにつれて、過去の遺産はどんどん目の前から消え去っていく。その中で、この問題を風化させず、後世に伝える残していくために、これからの活動がますます重要になつている。私は、3年間の空白の時間を経て、自分のすべきことを再度確認した気がした。

## 2009年追悼式

日時 2009年2月1日(日)  
13時30分～  
場所 宇都市西岐波長生海岸  
遺族をお招きして、  
追悼式(チーサ)を行います。  
その後、市民交流会を行います。  
是非、ご参加ください。

